

## 天気が良ければ株価は上がる

株価動向は天候から大きな影響を受けていることが従来から知られている。ただ、従来の研究は、雲量の水準と株価指数の騰落率との間の研究が中心であった。本稿ではこうした雲量の水準が株価騰落率に与える影響を分析するとともに、雲量の変化と株価騰落率の関係も分析し、両者のうちいずれが大きな影響を与えているか明らかとする。

### 第1章 はじめに

天候と株価の関係についての研究が盛んになったきっかけは、加藤ら (2004) によるところが大きい。当日の東京における雲量が少ないと、株価指数の騰落率は大きくなる傾向が見られることが主張されている。本稿では、こうした雲量の水準と株価指数騰落率の関係を確認するとともに、雲量の変化と株価指数騰落率との関係についても検討を加え、いずれの要因からの影響が大きいのか分析する。

本稿の分析の結果、株価指数騰落率は、主に当日の雲量の水準から重大な影響を受けており、雲量の変化からの影響は限定的であることが判明した。

### 第2章 雲量の水準と株価騰落率

まず、従来から主張されている雲量の水準と株価騰落率の関係について確認しておく。加藤ら (2004) の中でも述べられているように、当日の雲量が少ない場合、株価は上昇する傾向が見られる。特に、東京の当日の雲量水準が 2 を下回るケースでは、株価の上昇が顕著である。図 1 では 1986 年 7 月から 2014 年 7 月までのデータを利用して、当日の雲量水準ごとに株価騰落率を集計した。この結果、雲量が少ない場合には株価騰落率が大きくなりやすい傾向が示されている。こうしたアノマリーが生じる原因は人間の心理に基づくものだと考えたい。

もっとも、このアノマリーを実際の資産運用に利用しようとする場合には、前日の 15:00 の段階で翌日の雲量を正確に予測し、株式のポジション構築を行う必要がある。こうしたハードルはあるもの

の、翌日の雲量を正確に予測できた場合には高い運用パフォーマンスが得られる。

図 1. の株価騰落率

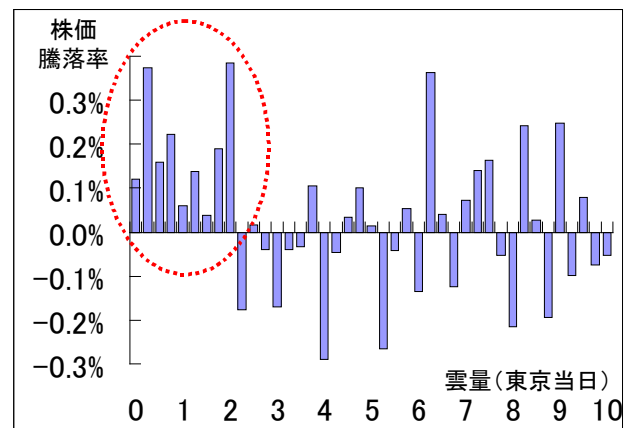


図 2. 晴れた日の株価パフォーマンス

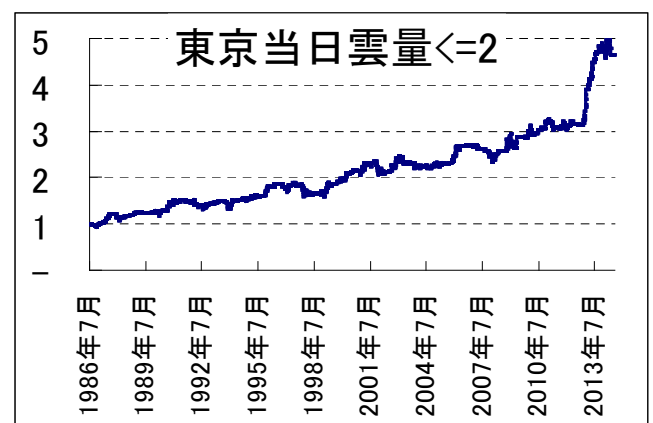


図 2 は、当日の東京の雲量が 2 以下の場合にのみ、株式を保有した際の投資成果を日経平均株価指数によって計算したものである。2013 年に異常に高いパフォーマンスを示しているものの、その時期を除

いた 2012 年までの期間で見た場合でも、年率 4.4% 程度のリターンが安定的に得られている。

### 第3章 雲量の変化と株価騰落率

次に、雲量の前日からの変化量と株価騰落率との関係についての検討を行う。雲量の変化と株価騰落率の関係は、図3に示した。全体としてみれば、雲量が前日よりも減少した場合には、株価は上昇する傾向が見られる。特に、前日比+10のケースと、-10のケースという極端な場合を除いて考えると、比較的きれいな関係がみられる。

図3. 雲量の変化と株価騰落率

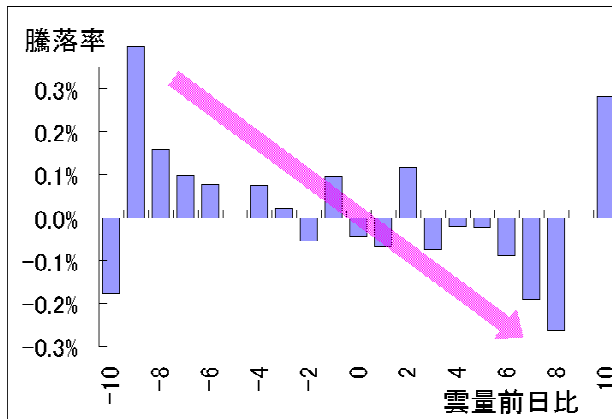
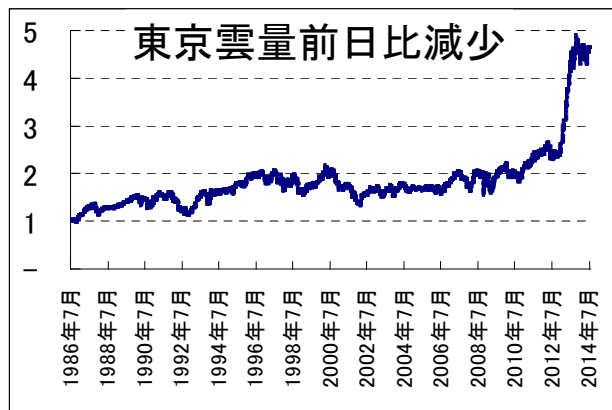


図4. 雲量が減少した日の株価パフォーマンス累計



続いて、前日よりも雲量が減少していた日に、株式を保有していた場合の投資成果を図4に示した。これも 2013 年に非常に大きなプラスのリターンが出ているが、それ以前の2012年までを見た場合でも、年率 3.3% のリターンが得られている。

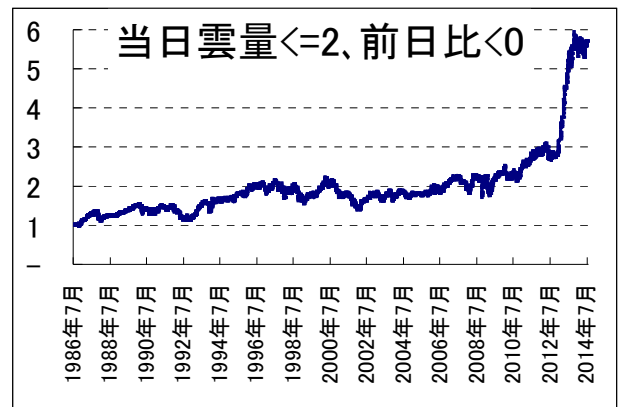
### 第4章 雲量水準と雲量変化の組み合わせ効果

では、雲量水準だけでなく、雲量変化も株価に大きな影響を与えているのだろうか。これを確認するために、この両者を組み合わせた場合、どの程度の株価パフォーマンスが得られるのか、検証する。ここでは、以下のいずれかを満たす場合に、株式ポジションを持っていたものとして投資成果を計測する。

- ① 雲量水準が 2 以下の場合
- ② 雲量が前日よりも少ない場合

この条件で投資を行った場合のパフォーマンスは図5のとおりである。

図5. 雲量水準と雲量変化の組み合わせ効果



ここでも 2013 年に異常に高いパフォーマンスが出てしまっているので、これを除いて 2012 年までの運用成果で考えることにするが、場合には年率リターンは 4.0% となり、雲量を単独で利用した場合よりリターン水準が劣る。このことから、雲量変化は株価動向には直接、大きな影響を与えていないのではないかと考えられる。

#### 参考文献：

天気晴朗ならば株高し，加藤英明，高橋大志，現代ファイナンス，2004